

Digest of Science of Labour

労働の科学

2023

July

Vol. 78, No. 7



板で制作した最初の作品／菅沼 緑

特集

デジタル化時代の働き方を考える(2)

情報革命と労働科学／坂本恒夫

「チャットGPT」(生成AI)の問題点—新世代の電卓：チャットGPT／小野 治

デジタル化は中小企業にどこまで浸透したのか／坂田淳一

デジタル化と人的資本／徐 玉琴

巻頭言

障害のある人が文化をつくる
石黒真知子

連載

労研アーカイブを読む 89
椎名和仁

漂流者たち—クミジョの肖像 28
本田一成

ILOインド南アジア産業保健通信 7
川上 剛

労働の科学

July
Vol. 78, No. 7

巻頭言

俯瞰 (ふかん)

障害のある人が文化をつくる

石黒 真知子 [詩人]

1

表紙作品：菅沼 緑「板で制作した最初の作品」
材料：松材
会場：ときわ画廊（東京・神田）
年度：1976年
撮影：安斎重男



デジタル化時代の働き方を考える(2)

情報革命と労働科学

[大原記念労働科学研究所] 坂本 恒夫5

「チャットGPT」(生成AI)の問題点

—新世代の電卓：チャットGPT—

[明治大学] 小野 治10

デジタル化は中小企業にどこまで浸透したのか

[桜美林大学] 坂田 淳一15

デジタル化と人的資本

[目白大学短期大学部] 徐 玉琴21

Series

ILOインド南アジア産業安全保健通信(7)

安全衛生委員会活動の進展

川上 剛27

Series

- 「#教師のバトン」で伝わる (25)
教職員の過酷な勤務環境 藤川 伸治 30
- 漂流者たち クミジョの肖像 (28)
『クミジョ白書2021』 (5) 本田 一成 34
- 労研アーカイブを読む (89)
生活疲労と人格変容 椎名 和仁 36

Column

- つれづれなるままに
グリーフケアとリーガルケア 細川 潔 41
- 自由と想像 (7)
彫刻に向かって 菅沼 緑 44
- 演劇が描く「働く人々」
『セールスマンの死』
 ピュリッツァー賞受賞の名作 編集部 46
- BOOKS
『未来の科学者たちへ To the Scientists of the Future』
 失敗は挑戦の証 椎名 和仁 50
- 『メンバーシップ型雇用とは何か 日本の雇用社会の真実』**
 現代の働き方とあり方を提示する 編集部 51
- 労働科学のページ 52
- 次号予定・編集雑記 64

障害のある人が文化をつくる

石黒 真知子



いしぐる まちこ
詩人

- ・主な作品…
- ・合唱組曲「光の種子をまくとき」
林学作曲
- ・カンタータ「鳥よ暑い夏にはばたけ」
戸島美喜夫作曲
- ・「二本のペンで」池辺晋一朗作曲

福井県あわら市の社会福祉法人「ハスの実の家」は創立六〇年をむかえる地域の障害者福祉の拠点です。無認可の作業所時代、法人化と建設資金獲得のために職員も保護者も苦しい運動を続け疲労困憊していました。そんななか若い指導員がコンサートを提案しました。障害のある人たちの思い、願いを創作曲にして演奏し広く市民に訴えよう。八〇年代は国際障害者年を契機に障害者作業所のコンサートが全国で取り組まれていました。「歌なんて歌ったこともない障害者をさらし者にするのか」という保護者を説得し、八四年に第一回ハスの実の家コンサートが開催されました。障害のあるひとりとひとりが歌の輪の中で個性を光らせて、八曲の創作曲を歌い、思いを語りました。コンサートは大成功。見事法人認可と自己資金を獲得したのです。

ハスの実の家コンサートは今日まで続いています。コンサートの主体には障害のある人だけでなく多くの市民が参加しています。家族、職員、後援会、児童、学生、高齢者、市長さんも参加したことがあります。コンサートに参加した高校生が文章を寄せています「今まで福祉という言葉に優しさのみを感じていたが、合唱で出会った障害のある仲間の歌を聞くと厳しさの方が強く、心からの訴えがあった。本当の福祉は人と人がお互いを認め合う心を育てることだ」この一文か

らハスの実の家の音楽実践が耕してきた沃野が見えてきます。ハスの実の家コンサートを聞いて多くの人が感動します。それは障害があっても「けなげに」に歌う姿に感動したのではありません。コンサートで歌われる創作曲は障害のある人が自らの思いを丁寧に紡ぎ楽曲にしたものです。彼らがその生きざまを高らかに歌う姿に心をうたれるのです。

当初は法人認可、資金作りを目的として取り組んだコンサートでしたが、結果として障害のある人の文化を考える契機になりました。今まで社会の隅っこでひっそり生きてきた人たちが堂々と自己を語り、ステージの真ん中で大きな声で歌います。コンサートを作っていくなかで、障害のある人は自己肯定感を育み、アイデンティティを確立していきます。さらに彼らの歌声に共感した人の輪が広がり豊かな社会を創る力が育っていきます。ハスの実の家の実践は障害のある人が文化を創造し、発信する担い手になり得るのだということ、さらにそれが人を育み地域を変える力になっていくことを教えてください。

全国の障害者施設では限られた職員体制で運営を行っている事業所も多く、音楽活動に取り組む時間が作れない、楽器を演奏できる職員がいない、という話を耳にします。かつてハスの実の家でコンサートを提案したのは歌の好きな青年で

した。特別な音楽の素養を持っていたわけではありません。実践を重ね障害のある人の文化を育てていったのです。全国の障害者施設の職員の中にはきつと音楽好きの人がいるはずですが、カラオケの好きな人もいるでしょう、地域のボランティアの力を借りることもできます。音楽を楽しむにはさまざまな形があり、全てが正解です。音楽には障害の有無や程度にかかわらず人と人をつなげる力があります。今、SNS等のネット空間には他者の尊厳を傷つける言葉があふれています。障害のある人が発信する文化はそれとは対極にあるのです。じっくり「鍛えられた言葉」の文化です。私たちは言葉を鍛える意味を今いちど問い直してみたいです。

